



青年期における対人恐怖的傾向と自己愛的傾向を測定する短縮版尺度作成の試み

相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1):1-9

(Issue Date)

2009-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001679>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001679>



青年期における対人恐怖的傾向と自己愛的傾向を測定する短縮版尺度作成の試み

A study on construction of short version scales measuring anthropophobic tendency and narcissistic tendency in adolescence

相澤 直樹*

Naoki AIZAWA*

要約：本研究では、研究目的上の必要性から対人恐怖的傾向と自己愛的傾向を同時に測定することができる短縮版の尺度作成に取り組んだ。従来の対人恐怖的傾向に関する測定尺度、ならびに、自己愛的傾向に関する測定尺度を参考として、対人恐怖傾向尺度20項目、自己愛的傾向尺度22項目を作成した。これらの尺度と対人恐怖心性尺度（堀井・小川, 1996, 1997）、NPI（大石, 1987ab）、NPS短縮版（谷, 2006）を含む質問紙を大学生男女に実施した。得られたデータに探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施したところ、対人恐怖的傾向尺度で3因子（過敏さ・劣等感、緊張感・圧倒感、違和感・回避）が算出され、自己愛的傾向尺度においても3因子（有能感・誇大感、傷つき易さ・賞賛希求、搾取・特権意識）がえられた。さらに、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を実施したところ、一部でモデルの修正を要したものの、おおむね十分なデータとの一致度が得られた。最後に、対人恐怖的傾向尺度と対人恐怖心性尺度、自己愛的傾向尺度とNPI、ならびに、NPSの相関係数を検討したところ、おおむね妥当な相関関係が得られた。しかし、自己愛的傾向尺度の「搾取・特権意識」でのみ他の尺度と強い相関関係がみられず、今後の検討が必要であると考察された。

問題と目的

従来、我が国の青年期を対象とする心理学領域においては、対人恐怖的傾向（anthropophobic tendency）に関する諸研究がその一端をしめてきた。この概念そのものは、森田・高良（1953）、森田（1960）が初めて詳細にとりあげた対人恐怖症という臨床症状に由来するものである。それが、1960年代から70年代にかけて日本文化論や社会学の見地から、広く日本人一般に共通する心理として論じられようになり、その中で特に思春期・青年期に広く見られる悩みとして注目されるようになる（レビューとして、田中・小川, 1992, 福井, 2007）。その後、今日に至るまで心理学的尺度を用いた調査研究が多数報告されている。

一方、近年になって青年期における自己愛的傾向（narcissistic tendency）、あるいは、自己愛的人格（narcissistic personality）といった特徴に着目するものが増加しつつある。この概念も、そもそもは1970年代にアメリカを中心に研究された自己愛的人格障害という臨床事態に基づくものである（Kernberg, 1975, Kohut, 1971, 1977）。それが、今日社会問題となりつつある青年の引きこもりや攻撃行動にいわゆる自己愛的な心性が広くかかわっているとの知見が提出されていることに関係して、特に注目されているものと思わ

れる（小塩, 2002, 湯川, 2003, 阿部・高木, 2006など）。そして、いくつかの心理学的測定尺度が報告されている。

以上の研究動向とは別に、筆者は、青年期における対人恐怖的傾向と自己愛的傾向の研究をおこなってきた（相澤, 1999, 2002, 2003, 2006）。初期には、両傾向が自己愛という包括的な概念により理解しようとの仮説を立てていたが、最近では自己愛概念の再検討を経て原則的には別々の行動傾向であると位置づけている（相澤, 2008a,b）。そして、それらの一見相反する傾向が思春期から青年期にともに高まることを理解することが、この時期の自立の課題を中心とした心理を理解することに重要な知見をもたらしようものと思定している。

以上の問題意識と目的から、筆者の研究においては対人恐怖的傾向と自己愛的傾向を同時に測定する必要性が必然的に生じてくる。以下に述べるように、これらのそれぞれの傾向についてはすでにすぐれた心理測定尺度が開発されており、かつ、いくつかの短縮版や簡略版も準備されている。しかしながら、それらを用いても対人恐怖的傾向と自己愛的傾向の2つの尺度を同時に実施すると、おのずとその項目数が増加せざるを得ない。結果的に、研究目的のために用いる他の尺度や調査手法に制限が生じてしまいやすく、また、調査協力者への負担も増加することとなる。以上のことから、本研

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所講師

(2009年4月1日 受付)
(2009年9月1日 受理)

究では比較的少ない項目数により対人恐怖的傾向と自己愛的傾向を同一のフォーマットで測定するための尺度の作成を試みることにした。

対人恐怖的傾向や対人恐怖的心性（以下、対人恐怖的傾向）を測定する質問紙式尺度の開発は、小川ら（1974, 1979ab, 1980）による一連の研究に始まる。小川（1974）は、大学生に対するアンケート、対人恐怖症者との面接記録、既成の性格検査をもとに対人恐怖的な悩みを表現する項目を多数収集し、内容上の整理や大学生と対人恐怖症者への調査を介して117項目の質問票を作成している。そして、それを120名の対人恐怖症者を対象に実施し、得られたデータを因子分析にかけ8因子を抽出している。各因子の内容は、「集団に受け入れられない」、「自分に満足できない」、「他人が気になる」、「くつろいで人とつき合えない」、「自分が気になる」、「気分がすぐれない」、「多数の人に圧倒される」、「変な人に思われそう」である。その後、小川らは、この「対人不安質問票」をもちいて文化差や地域差、成育環境と対人恐怖的傾向の関係を検討する一連の研究をおこなっている（小川, 1979ab, 1980）。また、林・小川（1981）は、この「対人不安質問票」の項目整理に取り組み、66項目の「対人関係質問票」を作成している。

以上の小川らによる対人不安質問票を原版として、そののちいくつかの測定尺度が生みだされている。田中・穂苅・福田・小川（1994）は、対人不安意識の時代的な推移を検討する中で、「対人関係質問票」に因子分析を施し、8因子を抽出している。因子内容は、「集団に溶け込めない」、「他人が気になる」、「自分の能力に満足できない」、「目が気になる」、「大勢の人に圧倒される」、「ささいなことを気に病む」、「生きている充実感がない」、「気持ちが不安定である」である。また、堀井・小川（1996, 1997）は、「対人関係質問票」をもとに新たな尺度整理に取り組み、30項目の「対人恐怖心性尺度」を作成している。得られたデータに因子分析を実施し、6因子構造を算出している。この堀井らによる対人恐怖心性尺度が、小川らによる一連の心理尺度の中で最も項目数が整理されているものに位置づけられる。一方、永井（1994）は、対人恐怖の悩みの構造に関する分析から、対人恐怖的構造を「対人状況における行動・態度」、「関係の自己意識」、「内省的自己意識」の3次元により大きく分けられるものと仮定し、それに対応した質問紙尺度を作成している。小川（1974）による対人不安質問票や対人恐怖症者の訴えの内容、大学生に対する自由記述調査から項目を収集し、得られた71項目を大学生449名に実施し、因子分析の結果、仮説の3次元に対応する因子を抽出するとともに、次元ごとに因子分析を再度おこなうことで、「対人状況における行動」に3因子（「対者とのうちとけた行動の困難さ」、「緊張感の高まり」、「視線の問題」）、「内省的自己意識」に2因子（「自己の不安定さと劣等感」、「自己の統制の弱さ」）をみいだしている（「関係的自己意識」については1因子）。さらに、内田（1995）は、世間に対するイメージと対人恐怖的傾向の関係を検討する研究の中で、21項目からなる「対人恐怖尺度」を作成している。これは、具体的な行動上の問題を意味する「行動」因子と観念的な悩みを意味する「観念」因子の2因子から構成されるものである。相澤（2002）は、対人恐怖的傾向における理想自己と現実自己の不一致を検討した研究の中で、相澤（1997）の研究を参考に31項目の「対人恐怖的心性項目群」を作成している。209名の大学生デー

タに因子分析を実施し、3因子を算出している。各因子の名称は、「否定的な公的自意識」、「対人場面における違和感」、「対人場面における心的苦痛と回避傾向」である。

以上のような対人恐怖的傾向に関する尺度研究では、さまざまな下位因子や下位尺度分類が提起されている。特に、小川らの研究グループによる一連の研究と、それ以外の尺度研究では内容的にかなり差異がみられるようにうけとれる。しかし、これは実際には項目数と因子の抽出作業時における基準の違いによるものと考えられる。つまり、小川らのグループによる一連の尺度においては、項目、因子数ともに多いことから、体験のより具体的なレベルを反映するような因子の水準で計算がおこなわれている。それに対して、永井（1994）、内田（1995）、相澤（2002）においては、項目数が少なく因子数もより少ないことから、具体的なレベルからやや抽象された水準で因子の計算がおこなわれていると考えられる。以上のような表面的な差異を考慮に入れるならば、いずれの対人恐怖的傾向尺度も下記のような特徴を含んでいることがわかる。つまり、まず第一に、対人場面における緊張感や恐怖感などの情動的反応と、それに付随する身体的な不快感や行動上の不自然さの体験である。これらの内容は、対人恐怖的傾向の中心に位置づくものであると考えられる。次に、対人場面で体験される自意識の過剰な高まり、すなわち、他者にどのように思われているのか、嫌われるのではないかと過度に気にする傾向があげられる。これらの内容は、前述の情動的、身体的苦痛や行動上の問題を引き起こす原因となる意識のあり方であり、対人恐怖的傾向の中で重要な要素であるといえる。また、最後に、対人場面やその他において体験される落ち着けなさや違和感、ならびに、対人場面から引き下がろうとする回避傾向があげられる。この内容は、どちらかと言えば結果的要因にすぎないものであるが、対人恐怖的傾向が対人場面への参加困難やそこからの引き下がりを中心とすることを考慮すれば重要なものであると考えられる。

以上のもの以外の特徴内容を項目レベル、あるいは、因子レベルで含む測定尺度も少なくない。しかしながら、しばしば対人恐怖の臨床的定義として用いられる笠原（2001）による記述をみても、その主要な体験内容はほぼこの3つの特徴内容に集約することができる。したがって、本研究の目的である短縮版尺度作成にあたって効率的かつ、正確に調査協力者の対人恐怖的傾向を測定するにあたっては、上記の3つの内容を中心に項目の収集整理をおこなうことが最も妥当であると考えられる。

一方、上地・宮下（1992）によると、自己愛に関する最初の質問項目群はMurrayによって作成されたとのことである。Murrayは、人格全体に関する研究の中で44個の人格変数を想定し、そのうちの1つに自己愛を位置づけている。そして、主には自己への没頭、優越感情、賞賛欲求、過敏症などの特徴を中心に、20項目からなる質問紙を開発している。Murrayの研究は、初期の人格に関する大規模な研究として評価されているものの、自己愛の質問尺度としてはその後あまり多く用いられていない。

今日自己愛的傾向や自己愛的人格（以下、自己愛的傾向）の測定尺度として最も幅広く用いられているのは、Raskin & Hall（1979）により作成されたNarcissistic Personality Inventory（NPI）である。Raskin & Hallは、DSM-Ⅲに導入された自己愛的人格障害の診断基準をもとに223個の項目を作成し、いわゆるG-P分析と折半法

による信頼性分析をつうじて80項目を選択している。そして、それらを40項目ずつに分けて2組(Form A, Form B)の質問目録に構成している。回答者は、自己愛的な内容の記述とそうでない記述のいずれかを選択する形式により回答し、前者の記述の選択数がその人の得点となる。

Raskin & Hall (1979)の研究では、因子分析や下位尺度の作成などの手続きが報告されていない。この点について、Emmons (1981, 1987)は、主成分分析を通じてNPIの特徴を検討している。Emmons (1987)は、362名の大学生のデータに因子分析を実施し、「リーダーシップ/権威」、「自己没頭/自己賞賛」、「優越性/傲慢」、「搾取性/特権性」の4因子を抽出し、同時に、他の自己愛関連尺度との相関により妥当性の確認も報告している。一方、この研究を受けて、Raskin & Terry (1988)もNPIの尺度構造の検討に取り組んでいる。Raskin & Terry (1988)は、DSMにおける自己愛的人格障害の項目分類からおおむね8主成分が算出されることを想定して、1089名の学生データに主成分分析を実施している。そして、40項目から7主成分を算出し、下位主成分間相関と他尺度との相関を通じて妥当性を検討している。それぞれの主成分の名称は、「権威」、「自己満足」、「優越性」、「顕示性」、「搾取性」、「うぬぼれ」、「特権性」である。また、NPIの邦訳版は大石(1987a)により作成されている。その中で、NPI邦訳版への因子分析が、男子では「自己主張・統率性」、「身体賞賛・身体没頭」、「自己有能感」、「権威願望・注目願望」の4因子、女子では「自己主張・統率性」、「自己確信」、「注目願望」、「優越性」の4因子を算出したことを報告している。なお、この邦訳版については、その後も繰り返し尺度の信頼性と妥当性に関する研究が集積されている(大石, 1987b, 1988a, b, 1989)。

また、以上のようなNPI原版に関する研究以外にも、さまざまな尺度開発研究が報告されている。例えば、佐方(1986)は、NPIとDSM-Ⅲによる自己愛人格障害の特性記述、ミロン多面的人格目録を参考に、60項目の項目群を作成し大学生に実施している。そして、得られた233名のデータに項目分析、因子分析を実施して、42項目からなる自己愛人格目録を作成している。抽出因子数は3因子であり、「優越性・指導性・対人影響力」、「自己開示・自己耽溺」、「自己有能性・自信」と名づけられている。小塩(1998)は、従来のNPIを簡略化したNPI-Sを作成している。小塩(1998)は、男子高校生397名に30項目からなる項目群を実施し、因子分析をつうじて3因子解を算出している。因子名は、「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」であり、そのおのおのと尺度全体において高い信頼性係数をえている。そして、NPI-Sをもちいて青年期における友人関係、異性関係など広範な調査研究をおこなっている。さらには、NPI-S下位因子得点に再度因子分析を施すことによりえられた2因子構造にもつづいて、今日頻繁に言及されるようになった自己愛の2側面(誇大性と過敏性)を「自己愛総合」と「自己主張優位—注目・賞賛優位」の2次元で説明するモデルを提起している(以上の集成として小塩, 2004)。

さらに、近年では谷(2004a)が独自の観点から新たな尺度を開発している。谷は、自己愛的傾向を誇大性と過敏性の2側面(次元)でとらえられるとする知見を再検討し(谷, 2007)、誇大な特性と過敏な特性をあわせた幅広い特徴を測定しうる尺度(Narcissistic Personality Scale : NPS)を作成している。そして、構造方程式モ

デリングによる確認的因子分析により5因子構造を確認している。各因子は「有能感・優越感」、「自己愛性抑うつ」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性・自己中心性」、「自己愛的憤怒」と解釈され、「有能感・優越感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性・自己中心性」が誇大特性に、「自己愛性抑うつ」と「自己愛的憤怒」が過敏特性に相当するものと位置づけている。以上の尺度は、十分な信頼性が確認されており、かつ、他の心理尺度(対人恐怖的心性、自我同一性、自尊感情)との関連を検討することで妥当性も確認されている(谷, 2004b, 2005)。さらに、谷(2006)は、25項目からなるNPSの短縮版を作成し信頼性と妥当性を確認している。

以上のように自己愛的傾向を測定するさまざまな心理尺度が作成されている。因子構造や下位尺度構造においては必ずしも完全な一致が見られるわけではなく、また、それぞれが異なった特徴を有している。一方で、最初に作成された後の尺度の基本となっているNPIがDSMの診断的記述項目をもとにしていることから、ほとんどの尺度がそれに対応する内容をかかなりの程度含んでいる。つまり、自己に関する誇大な感覚、際限のない成功や権力、美しさや才能に関する空想、特別意識、過剰な賞賛への欲求、特権意識、他者への搾取的態度、共感の欠如、ならびに、羨望と傲慢で尊大な態度である。これらの特徴は、確かに自己愛的傾向をとらえるために十分なものであるといえる。

ただし、本研究の目的である短縮版尺度作成にあたっての効率性を考慮すると、若干内容に重複がみられる点も否定できない。そこで、下記の3つの内容特徴に集約するほうがより適切であると思われる。つまり、まず第一に、自己に関する誇大感や成功・権力等に関する空想、傲慢で尊大な態度にあらわされる自己に関する過剰にポジティブな感覚や意識である。これは、自己愛的傾向の中心的な特徴であり、自己有能感や万能感、優越感、自己耽溺、自己主張性として先行尺度の中にも含まれている。次に、対人場面における過剰な賞賛欲求、承認欲求、ならびに、それに関係して生じる他者の反応への過敏さや傷つきやすさである。この特徴は、前述の自己に関する意識が対人場面において直接表現されたものと位置づけられる。最後に、特別意識、特権意識、ならびに、他者への搾取的態度や共感性の欠如にあらわされる、他者への配慮の欠如と他者の道具的・搾取的な利用である。この特徴を含む心理測定尺度はかならずしも多くないが、自己愛的傾向の中でもっとも問題となる要素を含んでおり重要なものであると考えられる。

以上みてきたように、対人恐怖傾向においても自己愛的傾向においても、諸種さまざまな特徴をもつ心理測定尺度が作成されている。それらの因子分析や項目分類の内容をみると、相互にいくつかの点に差異がみられるものの、大きな枠組みで見ればかなりの共通点を見ることができるといえる。したがって、本研究では、以上のような知見を前提として項目の整理収集に取り組み、前述したような研究上の必要性から両傾向を測定する短縮版尺度の作成を試みることにする。

方 法

1. 測定尺度と質問紙の構成

(1) 対人恐怖傾向尺度と自己愛的傾向尺度

対人恐怖傾向尺度と自己愛的傾向尺度の作成においては、前述

した両傾向に関する特徴理解と、相澤（2002）が「自己愛的人格項目群」作成の際にもちいた67項目を基礎として、対人恐怖の傾向尺度については、笠原（2001）による対人恐怖の定義、山下（1982）による臨床記述、小川（1974）による対人不安質問票と比較しつつ項目を選定した。自己愛的傾向尺度については、DSM-IVの「自己愛性人格障害」の特性記述、NPIの大石による邦訳版（大石、1987a）、NPS（谷、2004a,b）との比較検討をおこないつつ作成し、その後、内容の重複と回答のしやすさ、表現のわかりやすさなどを考慮しつつ、自己愛的傾向の質問項目22項目、対人恐怖の傾向の質問項目20項目を作成した。以上の項目を別々の調査シートとして整理し、「あてはまらない～あてはまる」までの5段階評定により調査協力者に実施した。

(2)NPI

Raskin & Hall（1989）によるNarcissistic Personality Inventoryの大石（1987a）による邦訳版をもちいた。この尺度は、二者択一形式で自分にあてはまる項目への回答を求める形式のものであり、54項目から構成されている。また、その後の多くの調査研究により妥当性と信頼性が確認されている（大石、1987b、1988a、b、1989）。自己愛的傾向を意味する項目を選択した個数が得点となるが、項目番号34と40は分析から除外することが勧められているため今回の分析でもそれに従った。

(3)NPS

谷（2006）により作成されたNPSの短縮版25項目を用いた。谷（2004a）は46項目のNPSを作成し、尺度内、ならびに、再検査法を通じて十分な信頼性を確認した。また、対人恐怖の心性との弁別的妥当性、自我同一性や自尊感情との関連を検討することで構成概念妥当性も確認されている（谷、2004b、2005）。今回もちいたものはその短縮版であり、46項目NPSとの間で非常に高い相関関係が確かめられている。5因子構造であり、「全くあてはまらない～非常にあてはまる」までの7段階評定で実施される。

(4)対人恐怖心性尺度

堀井ら（1996、1997）により作成された対人恐怖心性尺度をもちいた。この尺度は、林・小川（1981）により作成された対人関係質問票の改定版であり、十分な信頼性と妥当性がえられている。項目数が30と削減されているにもかかわらず、対人関係質問票と同じ6因子構造を再現している。「全然当てはまらない～非常にあてはまる」までの7段階評定で実施される。

(4)質問紙の構成

今回の調査でも、全尺度を一度に調査協力者に実施すると、152項目の質問項目への回答を求めることになり過度な負担が懸念される。そのため、2度の調査（質問紙A・B）に分けて実施することとした。各質問紙の構成は以下のとおりである。

質問紙A：自己愛的傾向尺度（22項目）・対人恐怖の傾向尺度（20項目）、NPI（54項目）、NPS（25項目）

質問紙B：自己愛的傾向尺度（22項目）・対人恐怖の傾向尺度（20項目）、対人恐怖心性尺度（30項目）

2. 調査協力者

調査協力者は、兵庫県内の4年制大学に所属する大学生名385名（平均年齢19.68歳：男性129女性256）である。回答に何らかの問

題のあるものはみとめられなかったため、すべての調査データを分析に用いることにした。質問紙Aへの回答者数は192名、質問紙Bへの回答者数は193名である。なお、再検査信頼性を検討するために、質問紙Aに対する回答者のうち90名に対して約1か月の期間をあけて対人恐怖の傾向尺度と自己愛的傾向尺度のみからなる質問紙を実施した。

質問紙の配布と回収にあたっては、授業の講義時間中に一斉に実施しその場で回収をおこなった。その際に、本研究の趣旨と成果の公表方法、質問紙等の管理と匿名性の確保について説明し、同意のえられる場合にのみ回答するよう求めた。また、回答の途中であってもいつでも調査への参加を中断することができる旨を伝えた。

結 果

1. 対人恐怖の傾向尺度と自己愛的傾向尺度の分析

両尺度の項目特性、因子分析においては、質問紙Aと質問紙Bをあわせた385名のデータをもとに分析をおこなった。まず、項目ごとの得点の分布状況を確認したところ、特に問題のある分布を示す項目はみられなかった。そこで、信頼性分析をおこなったところ、対人恐怖の傾向尺度においては、すべての項目-総得点間相関が.4以上の値を示し、 α 係数は.920であった。自己愛的傾向尺度においてはおおむね.3以上の値を示し、 α 係数は.784であった。3項目のみ.2程度であったが（「自分について話すとき、大げさに話したり嘘をついたりする」、「人のために何かをするよりも、人が私のためにいろいろと取り計らってくれることを期待する」、「自分の役に立つかどうかで友人を選ぶことは、正当なことである」）、これらも弱いながらも全体との正の相関を示唆していることから分析に含めることとした。以上の結果から一定程度の信頼性がみられるものと判断した。

次に、両尺度の各々に対して探索的因子分析（主因子法・プロマックス）

TABLE 1 対人恐怖の傾向尺度の探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
a27 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる。	0.850	-0.138	-0.036
a11 ささいなことでも批判されたり非難されたりすると、ひどく動揺する。	0.693	0.203	-0.227
a03 他人のちよつとした優れた面を見て、ひどい劣等感を感じる。	0.688	-0.025	-0.088
a12 人といても自分だけ取り残されたような気持ちになる。	0.630	-0.105	0.231
a37 人といても、相手に迷惑ではないかと不安になる。	0.619	-0.017	0.035
a25 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われたりしないかと不安になる。	0.614	-0.076	0.066
a13 自分に自信がもてない。	0.576	0.107	0.061
a26 周りの人の視線が気になり落ち着かない感じがする。	0.573	0.177	0.052
a07 大勢の人前では、顔がこわばったり赤くなったりして緊張する。	-0.133	0.850	-0.102
a15 大勢の人の前にいると、いつも圧倒されてしまう。	-0.073	0.782	0.051
a05 自分の意見が正しいと思っても強く主張できない。	0.113	0.423	0.045
a23 自分は気が弱いと思う。	0.244	0.416	0.034
a20 人と面と向かうと、相手を意識して取り乱してしまう。	0.205	0.343	0.185
a22 人と心から打ち解けてつき合うことができない。	-0.102	-0.064	0.863
a31 人と自然につき合えない。	0.018	0.017	0.815
a14 人に近づきたい気持ちがあるのに、いつも人を避けてしまう。	0.164	0.198	0.408
	1.000	0.605**	0.592**
	0.670	1.000	0.458**
	0.651	0.543	1.000

TABLE 2 自己愛的傾向尺度の探索的因子分析(修因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
a02 自分は、将来成功する人間であると思う。	0.734	0.046	-0.105
a24 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ。	0.718	0.070	-0.150
a01 自分には、もって生まれたすばらしい才能がある。	0.671	-0.102	0.044
a41 たいいてい人は、私の話を喜んで聴きいてくれるようだ。	0.541	-0.051	-0.059
a35 他の人とは違って、自分は大いにもまれな人物である。	0.525	0.186	0.139
a04 自分は、要領(ようりょう)もいし賢明(けんめい)さもかえりなく思っている。	0.503	-0.156	0.240
a08 これまで自分の思い通りのやり方で、何事もうまくやってきた。	0.386	-0.031	0.029
a34 人に侮辱(ぶじやく)されたり蔑(さげす)まれたりすると、怒りをおさえられなくなる。	-0.169	0.647	0.012
a29 人から不当な評価を受けることには我慢がならない。	-0.105	0.635	-0.067
a33 何かにつけ自分より優れている人には嫉妬(しとつ)を感じる。	-0.138	0.615	0.025
a17 人の賞賛(しょうさん)をえたいという気持ちが強い。	0.165	0.566	-0.146
a32 ときどき自分が偉大な人間になっているような空想をする。	0.156	0.369	0.022
a39 人の話に耳を傾けるよりも、自分のことをもっと話したい。	0.075	0.367	-0.038
a36 自分の役に立つかどうかで友人を選ぶことは、正当なことである。	-0.119	-0.211	0.643
a40 人々を従わせることができるような権威(けんい)をもちたい。	0.041	0.235	0.486
a18 私の考えに周りの人を従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのと思う。	0.021	0.238	0.465
a21 必要ならばあまり気がねなく、人を利用することができる。	0.035	-0.025	0.443
a28 自分は今よりもっと高い地位や知性の人間と接するべきだ。	0.071	0.115	0.392
	1.000	0.142*	0.346**
	0.216	1.000	0.417**
	0.442	0.566	1.000

クス回転)を実施した。対人恐怖の心性尺度について因子分析を実施したところ、固有値の減衰状況は強い一元性を示唆していた。しかし、尺度の内容的妥当性、ならびに、他の尺度との併存的妥当性を検証するために、前述した理論的整理から3因子解を算出した。その結果、内容的に妥当な因子構造がえられたことでこれを採用することとした。複数の因子に同程度に負荷する項目を削除し因子分析を繰り返した結果、最終的に16項目3因子が得られた。累積説明率は48.18%であった(TABLE 1)。各因子の内容を高く負荷する項目から推測すると以下のように考えられる。第1因子では、おもに他者にどのようにみられているかを気にしたり、他者の視線を気にする項目が上位にあり、下位には自信のなさや劣等感などを意味する項目が含まれている。したがって、対人恐怖特有の他者への過敏さと劣等感を意味する因子と考えられるため、「過敏さ・劣等感」と命名した。第2因子は、他者の前での緊張感や被圧倒感を意味する項目が上位にあり、1項目のみ主張性の弱さを意味する項目が含まれている。したがって、「緊張感・圧倒感」と命名した。第3因子は項目数が少なく、人と自然に付き合えないという内容2項目と他者を回避する傾向の1項目からなる。したがって、「違和感・回避」と命名した。

自己愛的傾向尺度においても同様の手続きで分析をおこなった。固有値の減衰状況と因子内容の妥当性から3因子解を採用した。ただし、1項目(「どんなに悪い状況でもなすべきことを平然とすることができる。」)のみ第2因子に負の負荷量を示したため、これを除外し再度3因子で因子分析をおこなった。複数の因子に対し同程度の負荷量を示す項目がみられたが、それらを削除して再度因子分析を繰り返した。その結果、18項目3因子が得られた。累積説明率は33.19%であった(TABLE 2)。それぞれの因子に高く負荷す

る項目をみると、第1因子ではおもに自分の有能さや優越性、特別さなどを意味する項目が含まれることから「有能感・誇大感」とした。第2因子については、賞賛や権威を求める傾向と主張性を意味する項目が多く含まれるとともに、比較的上位に侮辱や批判への過敏さや嫉妬の項目が位置づいている。このことは、自己愛的な傾向を示す人が賞賛や権威を求めるがゆえに、同時に他者からの侮辱や批判、あるいは、優れた他者に対して敏感になる傾向を示しているものと思われた。そこで、「傷つき易さ・賞賛希求」と命名した。第3因子は、他者への利用的、搾取的態度と特権意識を意味する項目からなるため、「搾取・特権意識」と命名した。

以上の両尺度の因子構造についてデータとの当てはまりを検討するため、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を実施した。探索的因子分析の結果にしたがって、下位項目群に潜在因子を仮定し分析をおこなった。対人恐怖の心性尺度においては、GFI=.887、AGFI=.848、RMSEA=.086であった。また、自己愛的人格尺度においては、GFI=.914、AGFI=.889、RMSEA=.063であった。対人恐怖の傾向尺度で特に不十分な値であったため、修正指標を参考にモデルの修正を検討した。その結果、項目7と15、項目5と23の誤差項に共分散を仮定することで適合度の改善が期待された。これらの項目は相互の項目内容が極めて類似していることから、潜在因子によって説明されない共通性がみられることは納得のいくものであると考えられた。したがって、これらの項目の誤差項に共分散を仮定して再度確認的因子分析を実施したところ、GFI=.901、AGFI=.864、RMSEA=.080と顕著な改善がみられた。以上のことから仮説された因子モデルのデータに対するあてはまりは十分なものであると考えられた。なお、潜在因子から項目へのパス係数はいずれも1%水準で有意なものであった(Figure 1, Figure 2)。

対人恐怖の傾向尺度、ならびに、自己愛的傾向尺度の下位尺度ごとの信頼性係数(α 係数)は、前者の「過敏さ・劣等感」で.868、「緊張感・圧倒感」で.771、「違和感・回避」で.772、後者の「有能感・誇大感」で.787、「傷つき易さ・賞賛希求」で.676、「搾取・特権意識」で.653であった。また、両尺度の再検査信頼性を検討するため、総得点と下位尺度ごとの相関係数を算出した。その結果、対人恐怖の傾向尺度の総得点で.830、第1下位尺度で.795、第2下位尺度で.774、第3下位尺度.797の値を得た。また、自己愛的傾向尺度の総得点で.781、第1下位尺度で.835、第2下位尺度で.714、第3下位尺度.566の値を得た。以上の結果から、おおむね十分な信頼性が支持されたといえる。

2. 対人恐怖の傾向尺度と対人恐怖心性尺度の関係

TABLE 3 対人恐怖の傾向尺度と対人恐怖心性尺度の相関

対人恐怖の傾向	対人恐怖心性尺度 ^{**}						Total
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	
F1	.844**	.574**	.540**	.515**	.404**	.562**	.738**
F2	.541**	.544**	.831**	.582**	.378**	.386**	.713**
F3	.553**	.748**	.505**	.491**	.236**	.450**	.749**
Total	.806**	.703**	.724**	.619**	.421**	.567**	.816**

** p<.01 * p<.05

^{**}対人恐怖心性尺度下位尺度…F1=「自分や他人が気になる」、F2=「集団に溶け込めない」、F3=「社会的場面で当惑する」、F4=「目が気になる」、F5=「自分を統制できない」、F6=「生きることにつかれている」

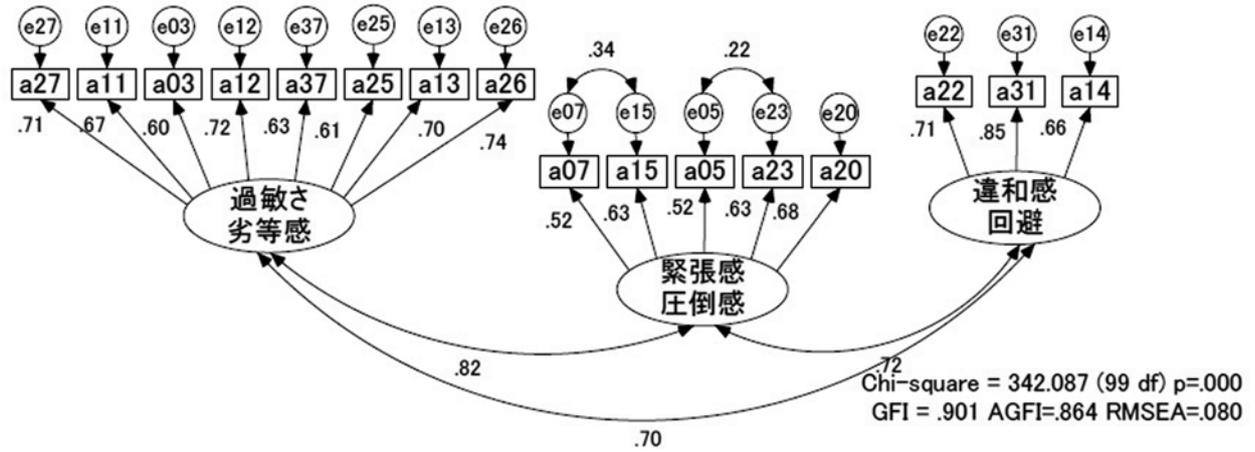


FIGURE1 対人恐怖の傾向尺度の確認的因子分析

本研究の対人恐怖の傾向尺度の並存的妥当性を検討するために、堀井ら（1996, 1997）の対人恐怖心性尺度との相関を算出したところおおむね有意な正の相関係数がみだされた（TABLE3）。本尺度の総得点については、堀井らの尺度の総得点、「自分や他人が気になる」、「集団に溶け込めない」、「社会的場面で当惑する」との間に強い正の相関関係がみだされ、それ以外の下位尺度とは中程度の正の相関であった。前者の下位尺度は、内容的にみて堀井らの尺度の中で特に対人場面や対人関係に関する悩みに対応するものと考えられる。一方で、後者の下位尺度は、視線に特化した内容のものと自分自身に関する悩みの内容からなる。したがって、前者で特に強い正の相関関係が見出されたことは、本研究の尺度による測定が、対人恐怖的な悩みの中で特に対人場面や対人関係に関するものに集中していることを示唆している。

本尺度の下位尺度ごとにみていくと、第1下位尺度、「過敏さ・劣等感」においては、堀井らの「自分や他人が気になる」と特に強い正の相関がみられ、その他の下位尺度との間にも中程度の正の相関がみられた。本尺度の第1下位尺度は、堀井らの尺度における「自分や他人が気になる」とほぼ同じ内容の項目からなるため、両者の間に強い相関関係が見出されたのは当然といえる。また、本尺度の第2因子、「緊張感・圧倒感」については「社会場面で当惑する」ともっとも強い相関を示し、「自分や他人が気になる」、「集団に溶け込めない」、「目が気になる」との間でも中程度の相関がみられた。特に前者の結果は、項目レベルでみるとほぼ内容的に同じであることから、十分に納得しうるものであるといえる。一方で、「自分を統制できない」、「生きることに疲れている」との間ではやや弱い相関係数にとどまったことは、これらの下位尺度が純粋に自分自身に関する悩みを反映したものであるためであろう。第3下位尺度の「違和感・回避」においては、「集団に溶け込めない」下位尺度との間の方が強い相関関係を示した。この結果も、両下位尺度の項目内容が実質的にきわめて類似していることによるものと考えられる。「集団に溶け込めない」には、「違和感・回避」に含まれている回避傾向に関する項目は見られないが、この回避傾向は対人場面へのなじめなさや違和感の結果としてみられるものとして、ほぼ同一のことを指しているものと考えられる。一方で、「自分を統制で

きない」との相関が低い値にとどまったことには第2下位尺度と同様の理由が考えられる。以上のように下位尺度ごとの相関係数を検討すると、総得点の箇所ですべての本尺度全体の性質を下位尺度レベルで確認するような値になっていることがわかる。すなわち、本尺度は、対人恐怖的な悩みの中で対人場面や対人関係にかかわる側面を主に測定しており、おのおの下位尺度は、相互に強い結びつきを持ちつつも、堀井らの尺度の同様の側面を測定する3つの下位尺度に対応した下位側面を特に反映しているといえる。

3. 自己愛的傾向尺度とNPI, NPSとの相関

自己愛的傾向尺度の並存的妥当性を検討するために、自己愛的傾向尺度とNPIならびにNPSとの相関係数を算出した（TABLE4）。その結果、自己愛的傾向尺度の総得点においては、NPI総得点、NPS総得点、ならびに、「有能感・優越感」、「自己主張性」・「自己中心性」、「注目・賞賛欲求」、「自己愛的憤怒」との間に、中程度から強い正の相関関係がみられた。NPSの自己愛的抑うつとのみ有意な相関が得られなかったが、谷（1994a）によるとこの下位尺度は自己愛の過敏特性に対応するものの一つとされており、意味内容からみても、過敏特性の中でもっともその特徴を反映しているものと考えられる。本研究の尺度作成過程では、主に従来どおりの自己愛的人格を基準にして作成したため、あまり過敏特性は反映されなかったものと考えられる。

下位尺度ごとでは、自己愛的傾向尺度の第1下位尺度「有能感・誇大感」においては、NPI総得点の間にやや強い相関がみられ、NPSでは、総得点、ならびに、「有能感・優越感」、「自己主張性・

TABLE 4 自己愛的傾向尺度とNPI, NPSの相関

	NPI		NPS *				
	Total	F1	F2	F3	F4	F5	Total
自己愛的傾向							
F1	.621 **	.767 **	.482 **	.401 **	-.224 **	.002	.514 **
F2	.317 **	.194 **	.152 *	.550 **	.342 **	.585 **	.615 **
F3	.429 **	.382 **	.309 **	.405 **	-.026	.283 **	.472 **
Total	.637 **	.631 **	.439 **	.631 **	.044	.400 **	.637 **

**p<.01 *p<.05

*NPS下位尺度…F1=「有能感・優越感」、F2=「自己主張性・自己中心性」、F3=「注目・賞賛欲求」、F4=「自己愛性抑うつ」、F5=「自己愛的憤怒」

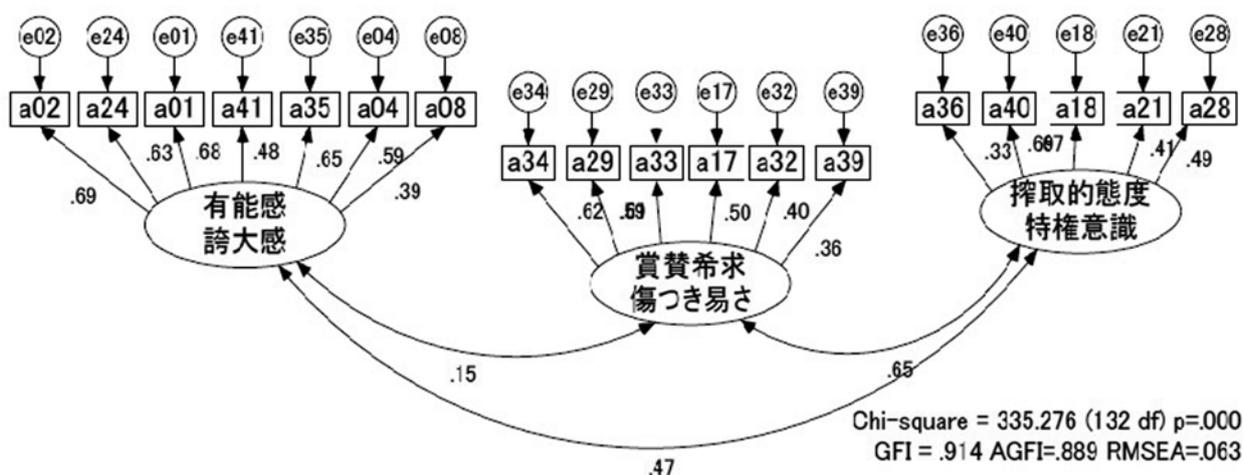


FIGURE2 自己愛的傾向尺度の確認的因子分析

自己中心性」との間で強い、ないしは、中程度の正の相関がみいだされた。本尺度の「有能感・誇大感」は、NPSの「有能感・優越感」と似た意味内容であり、また、「自己主張性・自己中心性」との間にも正の相関関係がみいだされることは十分にありうることである。第2因子「傷つき易さ・賞賛希求」では、NPI総得点との間ではやや弱いながらも正の相関、NPSとの間では、総得点において強い正の相関、ならびに、「自己愛的憤怒」と「注目・賞賛欲求」の間に強い、ないしは、中程度の正の相関関係がみいだされ、そのほかは弱い正の相関を示した。前項でも述べたとおり、本尺度の第2因子は、賞賛や注目への希求と、それゆえに生じる傷つき易さの両者を含むような因子であると考えられる。それゆえに、特にNPS下位尺度との上記の相関は、その推測を支持するものであるといえる。最後に、第3因子の「搾取・特権意識」については、他の因子に比べて相対的に弱い相関関係となった。この下位尺度に含まれる内容は、他者の道具的な利用と特権的な立場や待遇を求めるといったものであり、従来から自己愛的人格の一部に位置づけられてきた。いずれの尺度もこれに類する項目を含んでいるが、独立因子として抽出されることはあまり多くない。背景には項目数のバランスの問題（通常、搾取性や特権意識をあらわす項目は他の項目に比べて相対的に少ない）が関係していると思われる。この下位尺度の妥当性は今後も検討の必要があると思われるが、同時に本尺度の独自性に結びつく可能性もあるといえる。

考 察

1. 対人恐怖の傾向尺度と自己愛的傾向尺度の分析について

本研究では、対人恐怖の傾向と自己愛的傾向を同時に測定するための短縮版の質問項目尺度の作成を試みた。従来の対人恐怖の傾向の測定尺度、ならびに、自己愛的傾向の測定尺度の項目特徴、因子分析結果の特徴などから、項目構成の枠組みを検討しそれにそって質問項目を作成した。得られた42項目を大学生385名に実施し、探索的因子分析を実施したところ、両尺度に3因子が抽出された。また、各尺度の全体の信頼性係数は十分なものであり、下位尺度では自己愛的傾向尺度で一部低い数値がみられたが、項目数の少なさからみて許容すべきものと考えられた。また、再検査信頼性の検討

の結果でもおおむね満足すべき数値が得られた。以上の結果にもとづき、構造方程式モデリングによる確認因子分析を実施したところ、一部修正の必要があったもののおおむね十分なデータに対する適合度がえられた。以下では因子分析の結果について検討をおこなう。

対人恐怖の傾向尺度については、因子分析の結果3因子構造が算出された。ただし、各因子に負荷する項目数の偏りが見られた。つまり、多くの項目が第1因子に高く負荷し、第2、第3因子に負荷する項目は比較的少数であった。このような項目バランスの偏りは、尺度全体を考えた場合、一つの側面のみが全体に大きな影響を与えることとなるという点でふさわしくないかもしれない。しかしながら、この点については以下のように考えることもできる。

森田・高良（1953）、森田（1960）が指摘しているように、対人恐怖の成立過程においては、身体的な兆候（赤面、振るえ、緊張など）はむしろ結果的なものであって、中心となるものは意識的な側面である。それは、「恥ずかしがることをもって、みずからふがいないことと考へ、恥ずかしがらぬようにと苦心する『意地張り根性』」（森田・高良、1953、p.17）と表現されるように、対人場面における体験に過度に意識的になることをさしてあり、結果的に、通常誰しもうが体験する程度の精神的動揺であっても許容することができなくなる。そして、これが諸種の身体的兆候や精神的動揺の高まりとして体験され、あるいは、対人場面における落ち着けなさや回避傾向などの諸種の行動に結びつくと考えられる。本尺度の因子でいえば、主に上記の意識的な側面が「過敏さ・劣等感」に対応しており、身体的兆候や精神的動揺が「緊張感・圧倒感」、「違和感・回避」に対応しているものと思われる。以上のように考えると、本尺度の項目バランスの偏りは、むしろ対人恐怖の傾向における体験の重要度に対応しているものと考えられる。

一方、自己愛的傾向尺度に対しても、因子分析の結果3因子が算出された。因子の内容としては、第1因子の「有能感・誇大感」については、前述した従来の自己愛的傾向を測定する尺度においても共通して抽出されているものである。また、第3因子の「搾取的態度・特権意識」も一部の自己愛的傾向尺度の中には見いだされている。それに対して、第2因子の「傷つき易さ・賞賛希求」は特殊なものであると思われた。一般的には、賞賛欲求や自己顕示欲求などを意味する因子が見出されることはあり、また、傷つきやすさや嫉

妬心、怒りなどの因子も算出されている例はみられる。しかし、これらが一つの因子となったものはほとんどみられていない。その意味では検討を要するものと思われる。ただし、小塩(2002, 2004)は、自己愛の中の注目・賞賛欲求に特殊な位置づけを与えている。小塩は、自身の作成したNPI-Sに2次の因子分析をおこない、全般的な自己愛の度合いを意味する自己愛総合の軸と、注目・賞賛欲求と自己主張性の対比軸を想定し、注目・賞賛欲求が特にGabbard(1998, 2000)のいう過敏性に対応するものと位置づけているのである。この観点からすると、本尺度において賞賛欲求と傷つき易さが一つの因子にまとまったことには一定の意義があるものといえる。つまり、他者からの過度の賞賛や注目を求めることと、それが得られないために怒りや嫉妬を体験することは表裏一体の関係にある可能性が示唆される。この点はなお仮説的な推測に過ぎないために今後検討していく必要はあるものの、本尺度の因子構成が一定の合理性を持つものであることを示しているともいえる。

以上のように検討すると、本研究の短縮版尺度は、今後検討を必要とする点を残しつつも、一定程度実用に耐えうるような因子構造と項目構成を示しているものといえよう。

2. 対人恐怖的傾向尺度、自己愛的傾向尺度と他の尺度との相関

本研究では、両尺度の妥当性を検討するため、堀井ら(1996, 1997)による対人恐怖心性尺度、大石(1987a)による邦訳版NPI、谷(2004a)のNPSを同時に実施して相関関係を検討した。その結果、本尺度と対人恐怖心性尺度との間では、おおむね中程度から強い相関関係がみいだされた。その中で、本尺度の総得点に関しては、堀井らの尺度の総得点、「自分や他人が気になる」、「集団に溶け込めない」、「社会場面で当惑する」の特に対人場面や対人関係にかかわる下位尺度と強い相関が見られた。さらに、下位尺度間の関係では、本尺度の「過敏・劣等感」が堀井らの尺度の「自分や他人が気になる」と特に強い相関、また、本尺度の「違和感・回避」が、「集団に溶け込めない」と強い相関を示し、「緊張感・圧倒感」は、「社会的場面で当惑する」ともっとも強い相関を示した。それ以外の下位尺度間の相関においても、おおむねが.5以上の中程度の強さの相関が見られた。

以上の結果は、本尺度と堀井らによる尺度との関係が全般的に強いことを示唆している。その上で、本尺度の下位尺度が、特に堀井らの下位尺度の中で対人場面に関係するものと、それぞれに妥当な関連で特に強い相関関係が示したことになる。以上の結果は、本尺度の並存的妥当性を支持するものといえる。

一方、自己愛的傾向尺度については、全般的に強い相関を示唆する値から無相関を示唆する値まで幅広くみうけられた。NPIと間では、本尺度の総得点、ならびに、「有能感・誇大感」、「搾取・特権意識」が中程度の強さの相関、「傷つき易さ・賞賛希求」が弱い相関を示した。また、NPSとの関係では、本尺度の総得点がNPSの総得点、ならびに、「自己愛的抑うつ」以外の下位尺度と強い、ないしは、中程度の正の相関を示した。また、下位尺度間の関係では、本尺度の「有能感・誇大感」がNPSの「有能感・優越感」、「自己主張性・自己中心性」と強い正の相関、「傷つき易さ・賞賛希求」が「自己愛的憤怒」と強い相関、「注目・賞賛欲求」と中程度の相関を示した。以上の結果は、本尺度の内容から推測される関連と一致するもので

あり、この範囲での妥当性は確かなものと考えられる。

一方で、意外な関連を示したのが本尺度の「搾取・特権意識」である。この下位尺度においては、NPIの総得点とNPSの「注目・賞賛欲求」との間で中程度の相関がみられたが、NPSの総得点、「有能感・優越感」、「自己主張性・自己中心性」との間では弱い相関を示唆する値にとどまった。再検査信頼性の検討においても最も低い値を示している。以上のことから、本下位尺度は信頼性と妥当性に問題を含んでいる可能性が考えられる。しかしながら、自己愛的な性質の中で、この下位尺度にふくまれる搾取的な姿勢や特権的な意識が特別な位置にあることを示唆する研究報告が少なくなく(Soyer, Rovenpor, Kopelman, Mullins, & Watson, 2001, Sturman, 2000, Ruiz, Smith, & Rhodewalt, 2001)、本尺度の中にこの下位尺度が含まれることの意義は一概に否定できない。以上のことから、第3下位尺度「搾取・特権意識」については今後慎重に検討する必要があると考えられる。

*本研究は、日本発達心理学会第19回総会(2009年3月23日～25日、於日本女子大学)において発表した内容に加筆修正を加えたものである。

《参考文献》

- 相澤直樹(1997)。「対人場面における対人恐怖的な悩みの分析」日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 548.
- 相澤直樹(1999)。「ナルシズムに関する一考察—現象像・病態、及び、精神力動論の整理の試み」大阪大学教育学年報, 4, 171-186.
- 相澤直樹(2002)。「自己愛的人格における誇大特性と過敏特性」教育心理学研究, 50, 215-224.
- 相澤直樹(2003)。「青年期の対人恐怖心性と自己不一致の関係について」神戸大学発達科学部人間科学研究, 10, 77-88.
- 相澤直樹(2006)。「自己愛に関する最近の研究動向(調査実証研究を中心に)」神戸大学発達科学部研究紀要, 14, 109-123.
- 相澤直樹(2008a)。「自己愛(narcissism)概念の再検討に向けて—フロイトにおける視座の展開に照らして①—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, 129-138.
- 相澤直樹(2008b)。「自己愛(narcissism)概念の再検討に向けて—フロイトにおける視座の展開に照らして②—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2 (印刷中).
- 阿部晋吾・高木修(2006)。「自己愛的傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響」心理学研究, 77, 170-176.
- Emmons, R.A. (1981). Relationship between narcissism and sensation seeking. *Psychological Reports*, 48, 247-250.
- Emmons, R.A. (1987). Narcissism: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 11-17.
- Gabbard, G.O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gabbard, G.O. (2000). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice third edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
- 林洋一・小川捷之(1981)。「対人不安意識尺度構成の試み」横浜国

- 立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報). 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖 金剛出版
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992). 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の外観 [2] 岡山県立短期大学紀要, 37, 118-127.
- 笠原 嘉 (2001). 対人恐怖 加藤正明他編 (2001). 精神医学事典 (縮刷版) 弘文堂, 515.
- Kernberg, O.F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self, A systematic approach to the psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders*. New York: International Universities Press.
(コフォート, H. 水野信義, 笠原嘉 (監訳) (1994). 自己の分析みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press.
(コフォート, H. 本城秀次, 笠原嘉 (監訳) (1995). 自己の修復みすず書房)
- 森田正馬 (1960). 神経質の本態と療法—精神生活の開眼 白揚社
- 森田正馬・高良武久 (1953). 赤面恐怖の治し方 白揚社
- 永井撤 (1994). 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- 小川捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要, 14, 1-33.
- 小川捷之・林洋一・永井撤・白石秀人 (1979a). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (1) —比較文化的観点から 横浜国立大学教育紀要, 19, 205-220.
- 小川捷之・林洋一・白石秀人・永井撤 (1979b). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (2) —(a) 地域性および (b) 幼少期における家族以外の成員との接触・非接触の観点から 横浜国立大学教育学部紀要, 19, 221-239.
- 小川捷之・木村方美・林洋一 (1980). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (3) —幼少期の家庭環境と自己象に関する比較文化的検討 横浜国立大学教育紀要, 20, 60-77.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係、適応、友人によるイメージ評定からみた特徴 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 大石史博 (1987a). ナルシズムの心理学的研究 (1) 関西学院大学人文論究, 37, 27-44.
- 大石史博 (1987b). ナルシズム的人格に関する研究 (2) — YG 性格検査との関係について 日本心理学会第 51 回大会発表論文集, 535.
- 大石史博 (1988a). ナルシズム的人格に関する研究 (3) — CMI, MMPI との関係について 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 109.
- 大石史博 (1988b). Narcissistic Personality の研究 (1) — MPI, YG 性格検査, EPPS との関係について 関西学院大学文学部教育学科 教育学科研究年報, 14, 1-5.
- 大石史博 (1989). ナルシズム的人格に関する研究 (4) — 共感性との関係について 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 155.
- Raskin, R. & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Raskin, R. & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 890-902.
- Ruiz, J. M., Smith, T. W., & Rhodewalt, F. (2001). Distinguishing narcissism and hostility: Similarity and differences in Interpersonal Circumplex and Five-Factor correlates. *Journal of Personality Assessment*, 76, 537-555.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定: 自己愛人格目録 (NPI) の開発 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 77-86.
- Soyer, R. B., Rovenpor, J. L., Kopelman, R. E., Mullins, L. S., & Watson, P. J. (2001). Further assessment of the construct validity of four measures of narcissism: Replication and extension. *The journal of psychology*, 135, 245-258.
- Sturman, T. D. (2000). The motivational foundations and behavioral expressions of three narcissistic styles. *Social Behavior and Personality*, 28, 393-408.
- 田中康裕・穂苅千恵・福田周・小川捷之 (1994). 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究, 12, 121-131.
- 田中康裕・小川捷之 (1992). 対人恐怖症論—その文献的考察 上智大学心理学年報, 16, 7-17.
- 谷 冬彦 (2004a). 新たなる自己愛人格尺度の作成—因子構造と対人恐怖的心性との弁別妥当性の確認 日本心理学会第 68 回発表論文集, 69.
- 谷 冬彦 (2004b). 新たなる自己愛人格尺度の作成 (2) —自我同一性と自尊心の関連から 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 52.
- 谷 冬彦 (2005). 自己愛人格の類型化に関する研究 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 31.
- 谷 冬彦 (2006). 自己愛人格尺度 (NPS) 短縮版の作成 日本教育心理学会第 48 回総会論文集, 409.
- 谷 冬彦 (2007). 人格心理学領域における研究動向の展望 教育心理学年報, 46, 72-80.
- 内田裕之 (1995). 大学生の世間意識と対人恐怖的心性との関連 心理臨床学研究, 13, 75-84.
- 山下 格 (1982). 対人恐怖の診断的位置づけ 臨床精神医学, 11, 797-804.
- 湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性—現実への不適応と虚構への没入をふまえて 犯罪心理学研究, 41, 27-36.

